

# THE CENTER FOR SHIN BUDDHIST STUDIES 親鸞仏教センター通信

2019年6月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター（真宗大谷派）

〒113-0034 東京都文京区湯島 2-19-11

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail shinran-bc@higashihonganji.or.jp

ホームページ <http://shinran-bc.higashihonganji.or.jp>

Facebook <http://facebook.com/shinran.bc>

Twitter [https://twitter.com/shinran\\_bc](https://twitter.com/shinran_bc)

2019.6

第69号

## 欲望と願生

親鸞仏教センター所長 本多 弘之

見えざるものへの深い祈り、それを言い当てることは、ほとんど不可能である。それを「願生」という言葉で、あえて具象化したものが、浄土への願いなのであると思う。人間存在はこの見えざるもの、聞こえざる音への深い祈りを、生存の根底に密かに与えられながら、現実には見えるもの、聞こえる音を、どうにか自分たちの要求に添わせようとする「欲望」に、突き動かされて生活しているのであろう。

この「欲望」が人間の意識上に現れて、強い願いとなっているのである。それが満たされない因縁に出遭った場合に、あふれ出る要求が「祈り」となるのだと思う。四苦八苦と教えられる苦悩、たとえば「求不得苦」とか「愛別離苦」のような事態に遭うと、なぜ今、自分にこの災難が襲うのか、という嘆きが起こる。その事実を引き受けられない魂のうめきが、「祈り」となって現れてくるのである。

現実の欲望による生活を、仏教は無明の闇に生死するものと教える。「田あれば田を憂う。宅あれば宅を憂う。」「田なければまた憂えて田あらんと欲う。宅なければまた憂えて宅あらんと欲う。」（『無量寿経』、聖典58頁）とあるように、有であ

ろうと無であろうと、人間には「憂う」という心理が付いてまわる。この憂鬱感を哲学したのが、デンマークのキルケゴールであった。そして彼は、絶望（希望がまったく無い）について、絶望すらできない絶望（死に至る病）だとまで突き詰めた。

ところが、『無量寿経』の「三毒五悪」の段には、この濁世の救いが無い様相を徹底的に語りながら、そのただ中に「願生」の呼びかけが説き出されている（聖典68頁）。その願生とは、因願では「欲生」である。親鸞は「信巻」において、欲生とは「如来の勅命」であると言う。その本願の成就文には、「願生彼国 即得往生」と教えられてある。欲生は、凡夫の欲望ではなく、如来の勅命であって、その成就としての願生だとされるのである。人間においては、云何にしても脱出できない流転の闇、それは凡夫の欲望からは絶対に超えられない大河（曠劫の罪業の背景）である。

それを超えさせたいとの祈りが、如来の大悲として教えられ、群生の罪業生活のただ中に「聞其名号 信心歓喜」の「願生」が与えられると教えられている。願生は如来の祈りと言うべきことなのである。

## 親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」④8

# 願生、即ち得生

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第119回と120回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第117回から一部を紹介する。

（親鸞仏教センター嘱託研究員 越部 良一）

### ■一念に「断」が成り立つ

「それ心を至して安楽国に生まれんと願ずることある者は智慧明達し功德殊勝なることを得べし」（『真宗聖典』63頁、東本願寺出版、以下『聖典』）。この『無量寿経』の言葉を親鸞聖人は『教行信証』の「信巻」に引用しておられます。それは『聖典』では245頁の「真仏弟子」のご自釈の後です。これはどういう文脈かと言いますと、239頁を見ていただきますと、後ろから5行目、「諸有衆生、その名号を聞きて、信心歡喜せんこと、乃至一念せん。至心回向したまえり。かの国に生まれんと願ずれば、すなわち往生を得、不退転に住せん」。これは本願成就の文です。ここに信の一念ということが出てくるわけですが、このすぐ前のご自釈で、「一念」は、これ信楽開發の時剋の極促を顕し、廣大難思の慶心を彰すなり」と。信楽が開發されるときの時剋、これは極促だと。つまり念々の今だと。今が今に連続するような今、これは次の時を待たない。過去と未来を包んだ今。この今、我々が出遇っているこの今の会座なり、この今の時に利益を得る。「廣大難思の慶心」、出遇った無上功德の喜びを、今、味わう。こういうことが押さえられています。

その一念の内容が展開されてきて、「横超断四

流」と言われてくる。我々の流転の命、過去が現在に來たり、現在が未來に行くというふうに感じられる現在は、流転の現在。それを断つと。自分で断つのではない、横ざまに断たれる。本願力によって断たれると。『聖典』の243頁のご自釈ですが、「一念須臾の頃に速やかに疾く無上正真道を超証す、かるがゆえに「横超」と曰うなり」と。「一念須臾」、今です。横ざまに來たるものに出遇う。光に遇うということを経験聖人は強く一念というところに押さえようとなさる。そこに、横超、超証と、超えると繰り返されるわけです。我々が自分で自分を越えた世界、有限の世界から無限の世界へ超越するのでない。横超の本願力である。その横超のはたらきを信ずるなら、そこに願成就の一念が成り立つ。そのことが五惡趣を截る、六道流転を超える。

我々はいつまでも流転の中にいるのではないか、だから生きているうちは駄目だ、死んでからしか行けないのではないか、などと考える浄土教もあるわけです。そういう浄土教は親鸞の浄土教ではない。それが、244頁の2行目のご自釈、「断」と言うのは、往相の一心を發起するがゆえに、生として当に受くべき生なし。趣としてまた到るべき趣なし。すでに六趣・四生、因亡じ果滅す。かるがゆえにすなわち頃に三有の生死を断絶す。「断」と言えるのは、それまでの苦悩の人生、流転の人生、闇の人生が完全に断たれるという事件が起こる、本願力との出遇いなのだ。それが往相の一心である。一心に一念、本当の今が与えられることがあるなら、そこに断が成り立つのだと。本願力のはたらきを信ずることにおいて完全に生死が超えられる。こういうすごいことをおっしゃるわけです。

## ■生死と涅槃との分水嶺に立つ

行にたまわった信心は無上功德だと。無上功德の内実とは、今、迷いの人生がここで超えられるのだと。名号に遇って闇が破られて願が満たされる、こう信ずる。そういうことにおいて成り立つものが真仏弟子である。そのご自釈で、「この信・行に由<sup>よ</sup>って、必ず大涅槃を超証すべきがゆえに、「真仏弟子」と曰う」（『聖典』245頁）と。大涅槃を超証する。この超証は横超です。横超の超越をいただくことが真仏弟子なのだと。

そのことにおいて、「それ至心ありて安樂国に生まれんと願ずれば、智慧明らかに達し、功德殊勝を得べし」（同上）と、先ほどの『無量寿経』の言葉を引用される。願生すればそういう功德が起こるのだと。この願生は、先ほどの本願成就文の「願生彼国 即得往生 住不退転」の願生です。願生は即ち得生、「願生彼国 即得往生」という事実に出遇う。出遇わしめる原理が至心回向です。至心回向を受けるなら、「願生得生 住不退転」。住不退転という利益が願生者に与えられる。この至心回向は如来のお心だと。如来の至心が「南無阿弥陀仏」として呼びかけてくださっているのだと。「我が名を称えよ、我が名を念ぜよ」と。そういうふうにして我々を包んで止まない大悲の願心に触れるという事実、それが信の一念に立つ<sup>くわい</sup>ということだと。願生すれば得生する。願生の位と得生の位は時が別ではありませんから、それが一念の内容です。それは「前念命終<sup>みょうじゅう</sup> 後念即生<sup>そくしょう</sup>」、前の念に死んで後の念に生まれかわる。常に今、念々に南無阿弥陀仏と共に流転の命が本願の命によみがえる。そういう事実を我々は生きていく。信の一念に過去と未来を包む。そういうように本願と値遇<sup>ちぐう</sup>する。

信の一念をいただくということは、本願力に出遇うことにおいて横超断四流、つまり迷いの命が断たれるような、生死と涅槃との分水嶺<sup>ぶんすいれい</sup>に立つことができるのだと。自分で立つわけではない。横超の本願力によって分水嶺に立つことが成り立つと言うのです。

（文責：親鸞仏教センター）

## 親鸞仏教センターの動き

（2019年2月～2019年4月）一抄一

### ■2019年

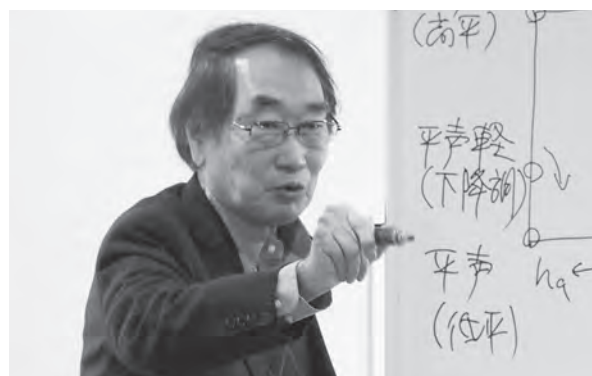
- 2 / 1 第119回（通算第170回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）
- 2 / 7 第14回研究員と学ぶ公開講座「親鸞が語る曇鸞—『高僧和讃』を中心に—」担当：青柳研究員 ①2 / 7 ②2 / 14 ③2 / 21 ④2 / 28
- 2 / 8 ご命日のつどい  
第21回「三宝としてのサンガ論」研究会
- 2 / 14 第197回清沢満之研究会
- 2 / 15 第34回「『教行信証』と善導」研究会
- 2 / 16 日仏東洋学会シンポジウム（日仏会館）：〈司会〉飯島研究員
- 2 / 21 第12回『尊号真像銘文』研究会  
山陽教区聖教学習会（姫路船場別院）：〈講師〉戸次研究員
- 2 / 22 第221回英訳『教行信証』研究会
- 2 / 25 第9回近現代『教行信証』研究検証プロジェクト全体会
- 3 / 1 第120回（通算第171回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）
- 3 / 4 第5回清沢満之研究交流会 共通テーマ「井上円了と清沢満之」〈副題〉「仏教の近代化と「哲学」」  
親鸞仏教センター研究員：長谷川琢哉、「宗教と信の問題を焦点として」國學院大学研究開発推進機構准教授：星野靖二氏、「絶対・相対の関係と『大乘起信論』」専修大学ネットワーク情報学部特任教授：佐藤厚氏、〈コメンテーター〉天理大学人間学部教授：岡田正彦氏、〈司会〉真宗大谷派教学研究員：名和達宣氏（文京区・求道会館）
- 3 / 7 第222回英訳『教行信証』研究会
- 3 / 8 ご命日のつどい  
第22回「三宝としてのサンガ論」研究会
- 3 / 13 第13回『尊号真像銘文』研究会
- 3 / 14 第198回清沢満之研究会
- 3 / 15 第61回現代と親鸞の研究会「トマス・アクィナスにおける信仰と哲学—善・愛・恩寵を視点として—」東京大学大学院総合文化研究科准教授：山本芳久氏（文京区・親鸞仏教センター）
- 3 / 25 第35回「『教行信証』と善導」研究会
- 4 / 9 第223回英訳『教行信証』研究会
- 4 / 12 ご命日のつどい
- 4 / 16 第16回親鸞仏教センターのつどい〈記念講演〉「往生のその先について」東洋大学学長：竹村牧男氏、「願生心と菩薩道」親鸞仏教センター所長：本多弘之（千代田区・学士会館）
- 4 / 22 第14回『尊号真像銘文』研究会
- 4 / 23 第23回「三宝としてのサンガ論」研究会
- 4 / 26 第10回近現代『教行信証』研究検証プロジェクト全体会



「『教行信証』と善導」研究会  
『尊号真像銘文』研究会合同報告

鎌倉仏家の注釈活動  
—親鸞遺文を通して—

金子 彰 氏



金子 彰（かねこ あきら）氏

東京女子大学名誉教授

広島大学大学院博士課程単位取得退学。新潟大学教育学部講師、同助教授、兵庫教育大学学校教育学部助教授、東京女子大学文理学部教授、東京女子大学現代教育学部教授などを歴任。

共著に、『明恵上人資料第二』（1978年、東京大学出版会）、『高山寺古訓点資料第一』（1980年、東京大学出版会）など多数。

論文に、「恵信尼文書の用語」（『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』28号、2009年、大谷大学）などがある。

なお、『アンジャリ』第33号（2017年6月号）に、論考「一途に書く、繰り返して書く——ことばを紡いだ人達——」をご執筆いただいている。

大<sup>だいしやう</sup>将<sup>しやう</sup>が朗々と『白<sup>はく</sup>氏<sup>し</sup>文集<sup>もんじゅう</sup>』を読む場面があります。その漢文の読み方は、完全に菅原家流の訓読法です。紫式部は父の菅原家流の訓読法を受け継いでいたことが、ここからわかるのです。親鸞が生まれた日野家にも、日野家流の漢文訓読法というものがあります。親鸞の訓読法は、日野家流なののでしょうか。それとも以後の比叡山で修学した訓読法なののでしょうか。これは、今はよくわかりません。解明したい問題の一つです。

次に「黒闇」に施された「クラキヤミノヨニタフル」（『唯信抄文意』正月十一日本）のような、「語釈の注」があります。これは親鸞の注釈の大部分を占めるもので、しかもほとんどブレがありません。同一被注釈語に対しては、著作が異なっても、ほぼ同じ左注が見られます。親鸞の左注は、その都度任意に施したのではなく、何か明確な根拠があったものと判

2018年11月30日、「『教行信証』と善導」研究会と「聖典の試訳『尊号真像銘文』」研究会は、東京女子大学名誉教授の金子彰氏をお招きし、合同研究会を開催した。

親鸞と現代との間には、およそ800年もの時間の隔たりがあり、その間には日本語そのものが大きく変化している。そのため『教行信証』の思想研究や、『尊号真像銘文』の現代語化に際しても、国語学的な研究の成果を、十分に踏まえる必要があると思われる。そこで親鸞の著作を扱う二つの研究会が共同して、この分野に造詣の深い金子氏から問題提起をいただいた。ここに、その一端を報告する。

（親鸞仏教センター研究員(当時) 青柳 英司)

## ■書き入れ注

親鸞の著作に対する分析の入り口には、さまざまな方向があります。私は、親鸞は注釈の人だと思います。上段に隙間があれば注を付け、文章の左右にも注を付ける。親鸞は熱心な教育者だったのだと思います。そして、この注釈を通して、鎌倉時代のいろいろな言語の実態と秘密があらわになってくるのです。

親鸞の著作には語のレベルから文のレベルまで、多岐にわたる注が見られます。まず「経証」に付された「キヤウシヤウ」（『西方指南鈔』）や、「古郷」に付された「フルキサト」（西本願寺本『唯信抄』）、それから反切<sup>はんせつ</sup>や訓点<sup>よみ</sup>といった「語の訓み方の注」があります。当時は訓読の仕方から、その人の学問背景がわかりました。例えば『源氏物語』の中で、薫<sup>かおる</sup>

断されます。

それから親鸞の著作には、「補助符合による注」も多く見られます。これには、アクセント記号である「声調」、漢文を読み下すための「返点」、文を区切る「句切点」、まだはっきりとした意味がわからない「合点」があります。親鸞の「返点」は院政期の打ち方で、比較的古い形式だと言えます。

一方「句切点」は、和文と漢文とで位置が異なっており、和文の「句切点」は昭和の文法学者・橋本進吉が示した、いわゆる文節の位置と多くが一致します。つまり親鸞は、現代の文法学で言うところの、文節や連文節の認識を把握していたことが窺われるのです。さらに親鸞の時代には、まだ文節に句読点を打つということが行われていませんでした。管見の限り親鸞の著作は、「句切点」を文節の単位で振った、最も早い例になるのではないかと思います。ここからは親鸞の言語学者的な一面が見られます。

## ■親鸞の表記法

親鸞の和文の著作を分析してみると、「大涅槃」や「無明」のような漢語は漢字で、「ひかり」や「ここ」のような和語は仮名で、という綺麗な書き分けが見られます。これに外れる例は、ほんのわずかしかなかった。ですが師の法然直筆の書状には、このような書き分けは見られません。親鸞の表記法の特徴だと見られます。

また親鸞には、独自の仮名遣いがあります。平安時代の紫式部のころには、「お」は「オ」、「を」は「ウォ」と発音されていました。ですが親鸞の時代には、このような発音の差異が無くなります。そのなかで同時代の藤原定家は、新しい仮名遣いを考案していきました。同様に親鸞も、独自の仮名遣いを作って実践しています。定家はアクセントの高低から、「オ」と「ヲ」の書き分けを行っていきませんが、親鸞はすべて「オ」に統一してしまうのです。自立語の語頭はすべて「オ」で統一しますし、複合助詞の「ヲバ」「ヲモ」「ヲヤ」なども全部「オバ」「オモ」「オヤ」に統一します。これは恵信尼の文献も、同じような傾向になっています。ただ後世の覚如や蓮如の文献には、親鸞のような表記法は見られません。

また、親鸞は聖覚の『唯信鈔』を何度も書写していますが、私は親鸞が聖覚の表記を書き換えていると考えています。『唯信鈔』は信瑞の『明義進行集』にも引用されていますが、これと親鸞が書写した『唯信鈔』を比較すると、表記法が大幅にちがいます。親鸞の写した『唯信鈔』は、すべて親鸞の表記法になっているのですが、『明義進行集』のほうはそうになっていません。

## ■親鸞の表現技法の特色

明治時代に日本語の表現技法を研究した、五十嵐力という人がいます。五十嵐氏は文章のレトリックを、「表」の原理と「裏」の原理とに分けています。「表」は意味内容をはっきりと示し、読者が理解し易い表現技法であり、「裏」は意表を突く言い方や逆説、遠回しにばかりした言い方などを指します。そして親鸞の注釈書は、多く「表」の原理で書かれているのです。

これに対して『歎異抄』は「裏」の原理、逆説ばかりで成り立っています。最初に人が驚くようなことを言って、あとからその理由を説明するという論法を採るのです。

親鸞は明らかに相手によって、文章の書き方を変えています。また弟子からの手紙を、添削して返すという例も見られます。このような点からは、親鸞の教育者としての側面が垣間見られると思います。

(文責：親鸞仏教センター)



研究会の様子

※金子氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第42号(2020年6月1日発行予定)に掲載予定です。

# 「近現代『教行信証』研究」

## 検証プロジェクト

### 真宗学の〈解釈と方法〉 をめぐる課題

杉岡 孝紀 氏

「親鸞聖人の根本著作の現代的解釈への展望を試みる」ことを使命（ミッション）とする「近現代『教行信証』研究検証プロジェクト」では、2019年1月19日、親鸞仏教センターを会場に龍谷大学教授の杉岡孝紀氏を招聘して研究会を開催した。氏は、単著『親鸞の解釈と方法』（法蔵館、2011年）において、真宗学の方法論を追究される中で、「解釈学」の援用による「創造的解釈」の可能性を提言されている。このたびの研究会では、同書の視座に基づき「真宗学の〈解釈と方法〉をめぐる課題」というテーマのもとご講義いただいた。ここにその一端を報告する。

（真宗大谷派教学研究員 名和 達宣）

#### ■真宗学は「新・宗学」なのか

1922年、大学令により仏教大学は龍谷大学に昇格改称され、これに伴い「宗学」「宗乗」に代わって新たに「真宗学」の名称が誕生しました。この名称変更は、心ある学者に学問論・方法論をめぐる議論を喚起せしめ、真宗学の学問的性格に自己変革を促す契機となりました。すなわち教権からの独立を求め、真宗学を一般諸学と比肩し得る普遍的な真理探究の学に構築することを目指す自由研究派（大学人）と、宗門立大学内の真宗学はどこまでも教権に制限されるべきだとする教権派（宗門側）との間の論争を生むことになりました。

私の恩師である岡亮二は、一貫して江戸宗学と真宗学との学問的性格のちがいを主張しました。岡は自身の『教行信証』研究の特徴について、親鸞独自の訓み方に注意を払うとともに、一つ一つの引文を独立させて読むのではなく、各文に有機的な関連を見、流れにそって諸引文の引意を窺った点にあると述べています。岡に従えば、それ自体が独自の時間と思想の流れをもって体系的に撰述されている『教行信証』の文章は、いずれも必



杉岡 孝紀（すぎおか たかのり）氏

龍谷大学農学部教授

1965年岐阜県に生まれる。1988年に龍谷大学文学部仏教学科を卒業、1993年に龍谷大学大学院文学研究科博士後期課程を単位取得満期退学。学位は博士（文学）。龍谷大学大学院文学研究科研究室副手、文学部講師、文学部准教授などを経て、2009年に文学部教授に就任。2015年より農学部教授に就任され、現在に至る。

専門は印度哲学、日本仏教、親鸞思想（真宗学）。歴史学・哲学・心理学など、さまざまな領域の研究成果を踏まえつつ、仏教思想の現代的な意義を探究されている。

著書に、『心の病と宗教性－深い傾聴－』（法蔵館、2008年）、『親鸞－浄土真宗の原点を知る－』（河出書房新社、2011年）、『親鸞の解釈と方法』（法蔵館、2011年）など多数。

ずそれ以前の文章を受けて記述されているのであって、その思想的流れを無視してはなりません。さらに岡は、原典と異なる親鸞独自の訓み方が施されている引用文は、どこまでも文字を文字の如く読み進めることが重要であるとしています。

こうした理解に対しては、本願寺派の江戸教学で言われる「文によって義を立て、義によって文をさばく」に立脚した見地より、「親鸞教義の根幹を理解するためには、まず『教行信証』全体の内容を踏まえる必要があるのではないか」との疑問が呈されています。いずれの立場も、聖教の文字を正しく読むことの大切さが主張されているという点では一致していますが、結局は共に全体が先か部分が先か、というウロボロスの環に陥らざるを得ないのではないのでしょうか。

#### ■真宗学の方法論をめぐる

本願寺派の教学では、ポスト・モダンの思潮に伴い、80年代半ばから「現場なき教学」への反省



の聲が高まり、その流れの中で近代教学さらには現代教学への批判が起こりました。しかし本願寺派の場合、はたして大谷派のように近代教学を構築し得たのか、ということ自体が問われなければなりません。その意味で私たちが問題とすべきは、ポスト・モダン思潮に対して真宗学は、その思想を真正面から議論することが無かったという点にこそあります。

現代教学の樹立に一生を捧げた信楽峻磨は、真宗学の学問的性格として「客観的解明」(科学性)と「主体的領解」(求道性)の二側面があることを指摘し、両者の矛盾した研究方法の「統合」にこそ真宗学の方法論があると主張しました。この「統合」の重要性は、東西両派の多くの先哲諸師によって繰り返し確認されてきた事柄でもあります。それにもかかわらず、真宗学をめぐる状況は必ずしもそのことを具現化できておらず、「非学問的(信仰的)・護教的研究」と「科学的・実証的研究」という両極化の固定化に陥っています。

こうしたなかで、私たちは研究者個人の学びの姿勢に「統合」の在り方を求めるだけでなく、「客観的解明」と「主体的領解」の間に位置する相互透入的な場に立った方法を追求することが必要となります。そのような問題意識をもって、私は『親鸞の解釈と方法』の中で「解釈学」に学ぶことの意義を主張したのです。

## ■真宗学の解釈学的研究

多様な解釈学の中で私が注目したのは、現代の解釈学をめぐる潮流の原点となったH・G・ガダマーの哲学的解釈学です。ガダマーは解釈を、文献の地平を客観的に再構成することではなく、著者の地平と解釈者の理解の地平とを弁証法的に止揚<sup>し</sup>して、両者を溶融した地平(視点)の中で見直す行為として理解します。この地平融合の形成を、ガダマーは「作用史」と名づけます。我々は常にこの影響の作用史によって導かれており、そのことを自覚すべきだということです。そのため解釈者は、真理を問いつつ、伝承との対話を通して単なる過去の客観的再現でない創造的理解の中で、過去を現在に「適用」していることになります。テキストは、それを適切に理解しようと思うならば、瞬間(時代状況)ごとに、新たに、そして別様な仕方<sup>で</sup>で理解されねばならないということです。

私たちは、聖教の文字を一字一句疎<sup>おろそ</sup>かにすることなく読解する必要があります。しかし文字の如くに理解する場合も、そこには必然的に主観の参与(主体的関与)という契機が介在することに注意しなければなりません。まったく主観の入り込まない理解は不可能であるし、また主体的関与の無い解釈は生きた解釈とはなり得ません。真宗学の学的営為は、理解を仕上げる「解釈」に帰結されます。そして、聖教の「解釈」は「理解」と「適用」を含んだ創造的行為という意味を有します。

## ■おわりに

対話は、互いに異なる者との間であるからこそ必要なのであり、親鸞が私にとって他者であるからこそ、対話は有益なのです。私たちの研究は、『教行信証』の背景や親鸞の意図を探究することに第一義があるのではなく、現前の『教行信証』が語りかける言葉、過去から伝承された意味内容に参与することに意義があります。したがって親鸞の言葉は、その都度、現在において理解されなければならないのであって、その意味で唯一の正しい理解は無いと言えます。正しい理解は『教行信証』の内容に属するのであり、その内容の実現こそが解釈だからです。

このように、私たちが親鸞に学ぶことは、親鸞の解釈の方法を学ぶことでもあり、また真宗学の学的営為が創造的解釈の反復であることを自覚することでなければなりません。

(文責：親鸞仏教センター)



研究会の様子

※杉岡氏の問題提起と質疑は、『近現代『教行信証』研究検証プロジェクト 研究紀要』第3号(2020年3月1日発行予定)に掲載予定です。

## ジャイナ教の信仰と生活

河崎 豊 氏

2019年1月22日、東京大学より河崎豊氏を講師にお迎えして、「ジャイナ教の信仰と生活」というテーマで、外部講師招聘研究会を開催した。釈尊と同時代・同地域に発生したジャイナ教の学習を通して、釈尊が出家するとき目指した沙門の姿やサンガの形成を考えていくことを目的として開催されたものである。講師の河崎氏からは、仏教の三宝と照らし合わせながら、ジャイナ教の教義や修行・戒律の諸相について、現在のジャイナ教研究の状況なども交えてご教示いただいた。ここにその一部を報告する。

(親鸞仏教センター研究員 戸次 顕彰)

### ◇はじめに

ジャイナ教という宗教は、現在のインドでもマイノリティーで、同じように研究者も世界中で非常に少ない領域です。しかし、膨大な文献が残されており、その言語の意味や文法の解明が進めば、ジャイナ教の具体的な実態がより一層明確になっていく魅力的な研究領域です。今後も、研究の進展に伴って、仏教学の記述も書き換わる可能性があるかもしれません。今日は、最近の学説の紹介もしながら、ジャイナ教について概説します。

ところで、仏教とは異なりますが、ジャイナ教にも「三宝」があります。正信・正知・正行です。今日はこの研究会が「三宝としてのサンガ論」という名称であることから、ジャイナ教を仏教の三宝（仏法僧）に当てはめて説明することを試みたいと思います。

### ◇仏

仏教の「仏」に相当する概念は、ジャイナ教では「ティールタンカラ」です。この岸から、かの岸への「渡し場（ティールタ）を作る人（カラ）」



河崎 豊（かわさき ゆたか）氏

東京大学大学院人文社会系研究科助教

2004年大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了（博士〔文学〕）。

大阪大学助手、大谷大学助教、大谷大学真宗総合研究所特別研究員などを歴任。

中期インド諸語やサンスクリット語で著されたジャイナ教資料を用いた、ジャイナ教出家修行者の戒律や教団運営、修行実践の変遷を主な研究領域とする。

主な論文に、「誰が出家できるのか？」（『ジャイナ教研究』第24号、2018年）、“Haribhadra on Property Ownership of Buddhist Monks,” *International Journal of Jaina Studies* Vol.13-5、2017年）など。

という意味があります。仏教の開祖を釈尊とすると、ジャイナ教の開祖に当たる人はマハーヴィーラです。この両者の伝記には類似する点が驚くほど多くあります。ジャイナ教では、過去にもティールタンカラがいたと考えられており、マハーヴィーラは現時点での最後のティールタンカラで、24代目に当たります。これは仏教の過去仏思想と似たものと言えます。

また、この人はジャイナ教の開祖というより、改革者と呼ぶほうが適切かもしれません。改革者と呼ばれる理由については、それまでの4つのサンヴァラ（漢訳仏教語の「律儀」に相当）を5つのヴラタ（誓戒）に改修したり、懺悔の儀礼を導入したりしたことが、具体的な改革の事例として挙げられます。活躍年代は、白衣派と空衣派の伝承で若干異なりますが、紀元前5-6世紀ころと考えられています。



伝記の内容は比較的詳しく書かれており、ヴァイシャリー近郊で誕生し、白衣派によれば、家庭や社会での為すべきことを為し終えた30歳のときに出家します。その後6年間、後にアージーヴィカ教の教主となるマッカリ・ゴースーラ（仏典に見られる六師外道の一人）と共に修行しました。最近の研究では、この人物がマハーヴィーラに大きな影響を与えていると考えられています。42歳で一切智を獲得して「ジナ（勝者）」となり、初説法をします。この「ジナ」が「ジャイナ教」の名称の由来でもあります。この初説法の時、11名のバラモンと討論して彼らを打ち負かし、その後、彼らは教団長となりました。こうして最初の教団が形成され、72歳で死去したことであります。釈尊とマハーヴィーラの伝記の比較は学界における今後の課題として重要だと思えます。

#### ◇法

ジャイナ教における「法」については、認識論・存在論など多岐にわたりますが、今日は解脱道を中心にお話をします。ジャイナ教の基本路線は「自力救済」です。出家修行者と在家信者とは、修行方法が別であり、在家者は解脱が不可能であるとされます。仏教では修行によって仏を目指すという菩薩道がありますが、ジャイナ教ではジナを目指すというような目的をもつ心は邪念として退けられるという大きなちがひがあります。

ジャイナ教では靈魂（ジーヴァ）の存在を認めます。何らかの永遠不滅の実体を認めなければ輪廻が成り立たないというのが、仏教以外のインドの宗教の基本的な考え方です。靈魂は本来、純粋無垢な存在ですが、人間の日々の行為（業）が物質化して、これが垢のように靈魂に付着し、これによって清浄な靈魂が重くなって下へ沈むことで、輪廻すると考えられています。そこで苦行によって古い業を焼き払い、新しい業はサンヴァラ（律儀）によって遮断するというのが、ジャイナ教の基本的な解脱へ至るメカニズムです。

これを支えている修行の前提となっているのが、マハーヴラタ（大誓戒）です。これは仏教の五戒に相当します。ジャイナ教の場合は非暴力・不妄語・不偷盗・不淫・無所有（物理的な無所有ではなく、所有に対する執着を断つこと）の五つ

で、その根本は非暴力です。すべてのヴラタが「しない」「させない」「他人がしているのを容認しない」の三つで構成されます。また、この他に行儀作法や奉仕・学習などの内的な苦行と断食などの外的な苦行など、さまざまなものがあります。

#### ◇僧

ここまで、仏教の仏法僧に対応させながらジャイナ教を説明してきましたが、ジャイナ教研究の中で最も研究が進んでいないのが僧（サンガ）です。出家教団がどのような形で運営されていたのかなどの実態については、未解明な点が多い領域ですので、今日はごく基本的なことのみをお話します。

仏教同様、ジャイナ教でも出家・在家の男女四衆の構成があり、見習い（仏教の沙弥に当たる）・長老・和尚・阿闍梨などの地位や役職も存在します。

在家信者の場合には明確な階級はありません。しかし、仏教と大きく異なる点は、先ほどの「マハーヴラタ」を少し弱めた「アヌヴラタ」をはじめ、在家信者に対して膨大な禁止事項を設けていることです。その他、特定職業への就労を禁止するなどの特徴もあります。なぜ在家者の生活に対して、このように多くの規制があるのかという理由については、在家信者コミュニティの結束を高めるためではないかと思っています。ジャイナ教が社会的にマイノリティーであったとしても、インドに生き残ることができた要因の一つは、こうしたグループの高い団結力によるものであると私は考えております。

（文責：親鸞仏教センター）



研究会の様子

※河崎氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第42号（2020年6月1日発行予定）に掲載予定です。

## 公開講座2018報告

2006年より開催してきた「公開輪読会」は、昨年の2017年度より「親鸞仏教センター研究員と学ぶ公開講座」という名称に変更し、「どなたでもご参加いただける連続講座」という基本姿勢を受け継いで、本年度も開催した。

本講座は年度ごとに共通テーマを定め、これに関わる問題を各研究員が、それぞれの研究領域から講義するものとなっている。本年度は2018年12月6日から2019年2月28日にかけて、3名（各4回・全12回）の研究員が担当した。毎回、年齢や立場を問わず、仏教や真宗に関心のある多くの方にご参加いただき、質疑応答も活発に行われるなど、当センターと参加者との交流の場となった。

本年度の共通テーマは「語る／語られる仏者—伝承から読み解く仏教思想—」とした。インドの釈尊から、宗祖・親鸞や清沢満之を経て、今日へと至る仏教の歴史は、教えが伝承されてきた営みでもある。その伝承の営みとは、仏陀・菩薩や高僧をはじめとする多くの仏者の存在とその教えがあり、そしてそれらが後代に語り直される過程でもあった。「語る仏者」と「語られる仏者」の両者に留意して仏道の伝承を読み解く試みが本講座である。

本年度は、このような視点によって、真宗学・仏教学、そして近代日本仏教の領域からそれぞれ三つの講座が開かれた。それぞれの担当研究員から、その一部をここに報告する。（※なお、研究員の肩書は開催時のものです。）



公開講座の様子

## 仏法が伝承される歴史空間

— 第一結集と『大智度論』 —

親鸞仏教センター研究員 戸次 顕彰

釈尊最晩年の旅と教えを記録する初期經典の『涅槃經』には、仏滅後を念頭においた弟子たちへの教誡が多く見られる。その中には、例えば次のような言葉があることが注意される。



「修行僧たちよ。それでは、ここでわたしは法を知って説示したが、お前たちは、それを良くたもって、実践し、実修し、盛んにしなさい。それは、清浄な行ないが長くつづき、久しく存続するように、ということをめざすのであって、そのことが、多くの人々の利益のために、多くの人々の幸福のために、世間の人々を憐れむために、神々と人々との利益・幸福になるためである。」（中村元訳『ブッダ最後の旅—大パリニッバーナ経—』岩波文庫、95～96頁）

このような言葉を残し、釈尊は入滅された。その後、仏弟子たちは、釈尊が40余年にわたって説いた法と律の存続を願い、入滅の地クシナラから再び王舎城へと場を移して第一結集を開催したのであった。釈尊が入滅して自由になったと言った比丘の発言や、リーダー亡き後に教えやサンガは雲散霧消するであろうという外道から発せられた言葉を受けて、500人の仏弟子たちによって開催されたものである。ここに仏道が伝承されていく一つの基点を見ることができる。

本講座では、共通テーマに掲げた「伝承」という言葉を受けて、第一結集の開催へ至る経緯やその内実の確認を行った。第一結集の様相については、律蔵に詳しく記載されるほか、龍樹の著作として伝えられる『大智度論』の中で「如是我聞」を注釈する箇所にも結集伝承が言及されている。大乘經典が「如是我聞」から開始されることの意味を探究するうえでも、一体あの時あの場で何があったのかを読み解いていかなければならないと思う。このような視座から、「第一結集へ至る経緯」（第2回）、「結集主催者・摩訶迦葉」（第3回）、「『大智度論』の結集伝承」（第4回）などのテーマで、仏法が伝承された歴史空間を探った。



## 教育者としての井上円了・清沢満之

親鸞仏教センター研究員 長谷川 琢哉

井上円了と清沢満之は、共に東本願寺の留学生として東京大学で学び、それぞれ哲学館（東洋大学）と真宗大学（大谷大学）の初代学長となった。本講座では、この二つの学校の創立理念を明治期の東本願寺の宗



門教育の在り方を踏まえて考察したが、その際特に注目したのが、東本願寺留学生の中から立ち上がった新たな学校設立の計画であった。

近年発見された井上円了の東本願寺に対する上申書の下書きの中で、その計画が素描されている。それによれば、近代日本において仏教を復興するには、「自教を研修する」ことを目指した「内務の事業」に加え、「自他の関係を論究する所謂外務の事業」が必要であるとされる。そして「外務の事業」としては、「宗教と道德との区別」、「宗教と理学哲学との異同」など、八条の項目が求められ、それを研究・教授するための学校（「哲学館」・「仏教館」）を本山の経営の下、設立すべきであると提言されたのである。

この新たな学校経営の希望は、本山によって認められることはなかった。しかしながら、そこで目指された理念は、まずは明確に井上円了の哲学館の設立に受け継がれることになる。また、清沢が学長をつとめた真宗大学の創立理念も、明治期の東本願寺の宗門教育と、その中から出てきた留学生たちの新しい学校設立への希望という歴史的経緯から見ることによって、一つの明確な流れを押さえることができる。特に東本願寺では、伝統教学に加え、たえず「余乗および哲学」を教えることの重要性が指摘されてきた。実際、東京につくられた真宗大学は、「自己の信念の確立」の上に「自信教人信の誠を尽くす」ことを理念としたが、そのカリキュラムでは「余乗および哲学」が重視されている。

このようにして本講座では、東本願寺の留学生たちの計画の延長線上において哲学館と真宗大学の創立理念を見ることによって、この二つの学校が共通の課題意識をもちつつも、その実現のための足場を異にするという側面を明らかにした。

## 親鸞が語る曇鸞

—『高僧和讃』を中心に—

親鸞仏教センター研究員 青柳 英司

現代において親鸞は、最も「語られる仏者」の一人である。しかし親鸞自身は明らかに、「語る仏者」であった。特に中国・南北朝時代の仏教者、曇鸞に対する注目は、親鸞思想の特徴の一つと



言っても過言ではない。親鸞の主著とされる『教行信証』の中で、最も引用量が多い論釈は曇鸞の著作である。また、本講座で取り上げた『高僧和讃』においても、曇鸞の和讃は最も数が多い。しかも、その内容には伝記的な記事が多く、親鸞が曇鸞の思想だけでなく、その生涯にも着目し、顕揚しようとしていた様子が窺える。

しかし、親鸞の直接の師である法然は、周知のように「偏依善導一師（偏に善導一師に依る）」の人であった。もちろん曇鸞は浄土五祖の第一祖に数えられるが、法然の『選択集』は大半が善導の著作から構成されており、曇鸞著作からの引用文は極めて少ない。では、どうして親鸞は、曇鸞に注目することになったのだろうか。この問題に対して、親鸞は法然・善導の系統を捨てて曇鸞に依ったという、二者択一的な考え方は適切でない。『教行信証』には善導著作の引用も極めて多く、また親鸞は晩年に至るまで、師・法然を敬愛している。むしろ、善導・法然が示した本願の思想を深めていくためには、曇鸞の教学に依る必要性があったのだと思われる。

事実、曇鸞の和讃には「本願円頓一乗」のように、直接は曇鸞の著作に還元できない表現も見られる。また親鸞が曇鸞に着目していく背景には、兄弟子である隆寛の影響があった可能性も指摘されている。そのため本講座では、単に和讃の言葉を『論註』の文脈に戻して解説するのではなく、親鸞が曇鸞の思想に着目する契機となった当時の思想状況なども視野に入れながら、曇鸞の和讃を読み進めた。



## 『アンジャリ』第37号 刊行 (2019年6月1日)

- 阿刀田高／「小説〈CHUJOH〉という酒場」
- 飛 浩隆／「若い友人への手紙」
- 加藤秀一／「亡き人を〈悼む〉こと、「死者」を忘れること」
- 本間美穂／「当事者の声の聞かれ方」
- 宝生和英／「強かな中世——真の文化の多様性に向けて——」
- 栗原裕一郎／「緊縮は人心のデフレ、お金は愛」
- 山野浩一／「「吉本隆明」という名の安心感」
- 佐藤 研／「キリスト教徒の禪」
- 早坂 類／「的となるべきゆふぐれの水」
- 本多弘之／「宗教心と根本言(5)」
- 中村玲太／「無辺の大地を想え」



## 『現代と親鸞』第40号 刊行 (2019年6月1日)

- 研究論文「井上円了における「仏教」の理論的同定とその実践的意義について」長谷川琢哉／「善導の深心釈と『念仏鏡』」青柳英司
- 現代と親鸞の研究会「遠藤周作と井上洋治の思索—現代日本人に南無の心に生きる喜びと平安を届けるために—」山根道公／「心の哲学と幸福論」前野隆司
- 清沢満之研究会「リフォーマーとしての清沢満之——『教団』の世紀と精神主義——」岡田正彦
- 「三宝としてのサンガ論」研究会「仏教サンガとはなにか」佐々木閑
- 第15回親鸞仏教センターのつどい「イスラームはなぜ誤解されるのか？」内藤正典／「他宗教との対話の方向性」本多弘之
- 連続講座「親鸞思想の解明」「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—(26)」本多弘之



### リレーコラム

## 「近現代の真宗をめぐる人々」第5回 おがわらしげじつ (小笠原秀實 [1885-1958])

真宗大谷派圓周寺(現愛知県あま市甚目寺町)の住職・小笠原啓實は、漢方医学でハンセン病・淋病・梅毒などの治療を得意とした医僧であった。その血脈は、二人の孫——仏教哲学者の秀實と、日本のハンセン病治療の父とも称される医学者の登——へと流れることになる。

秀實は、京都帝大で西田幾多郎に師事したのち、今の佛教大・花園大・大谷大などで教鞭を執り、小笠原兄弟の居処へは多くの学生が集った。そこで秀實は、特に造詣の深かった禅をはじめ、ヘーゲル哲学と華嚴思想、あるいはスピノザ的汎神論と大乘起信論など、東西思想を往還しつつ知見を授けたという。

権威への批判精神としてアナキズムを追究した秀實は、「すべて迷信的なもの、無用の拘束のもとに人間性霊の真髓を矯め徒らに不幸を誘導するもの、そうした一切を離れ白日のもとに人間相互の交歓を楽しみ、生命の真実を実現したいという願い」を有する真の「自由人」こそ、陣営の如何に関わらずアナキストであると構想していた。そして般若心経を平易に現代語訳した「般若心経意」の一節——「空の心は／何物をも許し／何物をも育ててゆく／それは限りなき光であり 楽しみであり／無我のさやけさである」は、詩人としても名高いこの仏教哲学者の面目躍如というべきものである。市川白弦など後代へも多大な影響を与えた秀實の日本思想史上における真価は、今こそ問い直さねばならぬのではないか。(飯島)

## 行事日程のご案内

### ■親鸞思想の解明

日 時：2019年6月3日(月) 18時30分～20時30分  
会 場：東京国際フォーラム ガラス棟 G602  
(東京都千代田区丸の内3-5-1)

日 時：2019年7月1日(月) 18時30分～20時30分  
8月6日(火) 18時30分～20時30分  
会 場：ビジョンセンター東京八重洲南口 703  
(東京都中央区八重洲2-7-12 ヒューリック 京橋ビル7階)

### ■ご命日のつどい

日 時：2019年6月14日(金) 10時～11時30分  
2019年7月19日(金) 10時～11時30分  
2019年8月9日(金) 10時～11時30分  
会 場：親鸞仏教センター仏間  
上記共に、事前申込み不要・無料です。

## センター新スタッフの紹介

あずま しんぎょう  
研究員 東 真行

1986年福岡県生まれ。青山学院大学文学部フランス文学科卒業。  
大谷大学大学院文学研究科博士後期課程(真宗学専攻)修了。  
元大谷大学文学部任期制助教。

ふじむら きよし  
研究員 藤村 潔

1980年愛知県生まれ。大谷大学文学部真宗学科卒業。  
同朋大学大学院文学研究科博士後期課程満期退学。博士(文学)。  
同朋大学非常勤講師。